

『光があるうちに』 (ヨハネの福音書 12章 34-43節) 2024.1.21.

<はじめに> 時は無限、永遠に続くと思われていますが、これも神の創造物で限りあるもので、それを私たちに託されていると聖書から私は学んでいます。時を支配される神は、物事のタイミング・機会を知り、それを私たちにも知らせようとしておられます。イエスもここで時を告げておられます。

I 光があるうちに

① イエスは光

イエス自ら「わたしは世の光です」(8:12)と称し、ヨハネもイエスを人の光と証しています(1:4-9, 3:19-21)。世を照らし、人にいのちを与え、道を示すイエスは人々の間に生まれ、人々はそれに照らされ、その祝福を享受してきました。

② 光があるうちに

イエスが世におられるのは、いつまでもではなく、その終わりが近づいていると語られます。35・36節どちらにも「光があるうちに」とありますが、同じことを言っているのでしょうか。違うところはありますか。勧める光への向き合い方も「歩きなさい」と「信じなさい」です。

③ 光の子どもとなる

子どもは親から生まれ、家族の一員であり、幼くても親の性質を継ぐ似た者です。イエスの光に照らされ、反射するだけの者はイエスが消え去れば闇に戻ります。しかし光の子は、イエスに照らされて光にふさわしく変えられ、光を放つ者です(エペソ 5:8, I テサ 5:5)。

II 限りある時

① 正常化バイアス

常識や前例にとらわれて、自分にとって都合の悪い情報を無視したり過小評価する、認知の特性のことです。前例がない、自分は大丈夫、まだ何とかかなと考えて、対処を避ける傾向が私たちにはあります。34節の群衆のことばにもそれは見られます。

② もうしばらく

イエスは自分の時が来たことを察知して、群衆に緊迫感をもって決断を迫ります。光が照り輝く昼間も、時が進むとやがて闇夜が迫り来ます。イエスの光に照らされて歩き、光を信じる機会は、いつまでも与えられてはいません。信じるチャンスには限りがあります。

③ 機会がある間に

私たちを取り囲む状況と主イエスのことばを重ね見るとき、「これまで」が「これからも続く」とは思えません。しかし、機会は「もうしばらく」残されています。このしばらくの間に、私たちがイエスを信じ、光にふさわしい人として整えられることを、イエスは強く願っています。

<おわりに> イエスが「もうしばらく」と言われるところに私たちは差し掛かっています。そのことに不安を抱き心を騒がせてはなりません。イエスは私たちに平安を与え、希望の光を示されています。「自分に光があるうちに、光の子どもとなるように、光を信じなさい」(36)と。(H.M.)